

(様式 8)

平成30年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進地域】

番号	15	都道府縣市名	新潟県
----	----	--------	-----

1 推進地域における学力に関する現状

推進地域及び推進校に入学する生徒の一般選抜学力検査の総合得点は、県の平均点よりも低く、義務教育段階の学習内容の定着が十分であるとは言えない状況にある。その分布の広がりも大きく、生徒の学力差も大きいと言える。また、学習時間調査では家庭で学習をしない生徒の割合が、平成27年度で約32%、平成28年度で約34%、平成29年度で約32%と家庭学習の習慣が定着していない生徒が多く、平成29年9月に推進校で実施した「生徒の実態に関する調査」では、「授業でわからないことが多い」と答えた生徒の割合が学年が上がるほど高くなり、生徒の3分の1を占めている。

その一方で、在籍する生徒の3分の1以上が近隣の中学校出身であることから、推進地域における「学力定着」の実践研究モデル校として、地域に根ざした取組が可能であると考えられる。

特に、近隣の中学校と連携しながら、推進校が、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を積極的に行うことによって、生徒の学力定着が図られるとともに、地域の生徒全体の学力向上につながることを期待される。

2 研究課題（平成30年度の重点課題）

- 推進地域及び推進校の生徒の学力の現状を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業を実践し、基礎学力の定着に向けた授業改善を進める。
- 義務教育段階までの学習内容についての「学び直し」を取り入れて、高校での学びのための土台作りも行い、獲得した知識や技能を活用する力を身に付ける。
- 生徒の学ぶ意欲を高め、学力の定着を図るとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、各教科特有の見方や考え方を働かせた学びを念頭において、中高で学ぶ内容のつながりや広がりを実感できるような教材の開発を進めるとともに、見方や考え方を働かせるための問いかけの内容や方法、場面づくりについて研究を進める。

3 研究の内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

- ア 推進校に、「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究委員会（学力向上推進委員会）」を組織する。教頭、教務主任、進路指導主事、国語科・数学科・英語科代表（各2名）からなり、全校体制で事業に取り組む。
- イ 学力向上推進協議会を年2回実施し、近隣地域の高等学校や中学校と指導方法を検討する。協議会の実施に併せて、公開授業を実施する。
- ウ 県教育委員会及び県立教育センターの各教科担当の指導主事が、推進校の実践研究の進捗状況についての検証や指導・助言を行う。
- エ 恒常的に互見授業を実施した上で、年2回開催予定の本協議会時には、近隣の高等学校及

び中学校に授業を公開し、授業についての協議や意見交換を行う。

オ 本協議会には、県教育委員会及び県立教育センターの指導主事も出席し、実践研究の進捗状況についての検証や授業についての指導・助言を行う。

(2) 推進校への具体的な支援・指導

ア 平成30年度の本事業実施計画を立案する際に、過年度の指定校の成果や反省点等を提供し、推進校が明確な目標を立て、着実に実践を進めることができるよう指導した。

イ 高等学校教育課指導主事、県立教育センター指導主事が推進校を訪問し、授業における学習事項の定着を図るための方策や、深い学びにつながる問いかけの在り方や授業づくり等について協議し、指導・助言を行った。

4 研究の成果、作成した成果物

- 学習状況アンケートの結果によると、授業改善の取組を進めたクラスについて、対話的に学ぶことや当該教科の知識・技能の習得だけでなく、見方や考え方を含めた学力が身に付いていることを実感している生徒が8割を超えた。
- 学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができるようになったと感じている生徒も8割を超えており、「互いの意見を交流させる活動が行われる授業」という視点での授業改善が進んでいる様子が見える。
- 本事業1年目の研究実践をまとめた中間報告書を作成した。

5 課題とその分析

本事業1年目の実践にあたり、学力向上推進委員会の委員が推進校の生徒の学力や教員の授業改善の意識等の状況把握をしながら、委員が授業改善の方向性を模索することから始め、委員が先導役として授業改善を進めていくことで、校内全体へ波及することを目指した。そのため、各教科内の教員間の連携や教科を越えた教員同士のつながり等、校内全体で授業改善に取り組む体制を構築するまでには至らなかった。したがって、全校で授業改善を実施していくための体制づくりが、次年度の課題のひとつである。

また、生徒は、自分の意見を述べることや互いの意見を交流させる授業について前向きにとらえているが、自信をもって伝え合うまでには至っていない面も見られるため、意見や考え方の正誤だけにとらわれることなく、教員が生徒の意見や考えをすくい上げることで、学びを深めていく授業を展開する指導法の確立も課題である。さらに、本事業1年目に引き続き、教科の特性に応じた「生徒の思考を活性化させる問いかけ」についても、研究を深めていく必要がある。つまり、教員が授業時の課題を与えるだけでなく、生徒の協働に積極的に関わり、深い学びにつなげるファシリテーターとしての役割を担うべく、専門性の向上を図る必要がある。

6 推進地域における研究成果等の今後の活用

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をさらに推進するため、推進校で本事業の実践に取り組んだ教諭を、教科指導の研修会等の講師として派遣し、その成果を全県に広げる機会を設ける。

7 その他

本事業における研究実践のさらなる充実を図るため、県教育委員会と推進校との連携を密にとりながら、生徒の学力定着に資する取組にしたい。

(様式 9)

平成30年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（学校）】

都道府県市名	新潟県	学校名	新津南高等学校
--------	-----	-----	---------

1 推進校における学力に関する現状、生徒の実態

<生徒数・学級数(平成30年4月現在)>

学校名	新潟県立新津南高等学校（にいがたけんりつにいつみなみこうとうがっこう）				
学 年	1年	2年	3年	計	教員数
学級数	4	5	5	14	31
生徒数	161	194	177	532	
学校のホームページアドレス			http://www.niitsumi-h.nein.ed.jp		

本校の生徒の高等学校入学者選抜一般選抜学力検査の総合得点は、県の平均点よりも低く、義務教育段階での学習内容の定着が十分であるとは言えない生徒が多い現状である。

平成29年9月に本校で実施した「生徒の実態に関する調査」では、「授業でわからないことが多い」と答えた生徒の割合が1年生で約28%、2年生で約32%、3年生で約36%と学年が上がるほど高く、生徒の3分の1を占める。

また、学習時間調査では、家庭で学習をしない生徒の割合が、平成27年度で約32%、平成28年度で約34%、平成29年度で約32%と家庭学習の習慣が身に付いていない生徒が多く、学習習慣の確立も課題となっている。

本校は、これらの課題を踏まえ、学力の定着と学力の向上を教育方針に掲げ、各教科で重点目標として取り組んでいるが、十分な取組とは言えない現状である。

2 研究課題（平成30年度の重点課題）

本校の生徒の学力の現状を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業を実践し、基礎学力の定着に向けて取り組む。

高校における国語・数学・英語の学習に必要な、義務教育段階までの学習内容についての「学び直し」を取り入れて、高校での学びのための土台作りも行い、獲得した知識や技能を活用する力を身に付けることを目標とする。

生徒の学ぶ意欲を高め、学力の定着を図るとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、各教科特有の見方や考え方を働かせた学びを念頭におき、中学校、高等学校で学ぶ内容のつながりや広がりを実感できるような教材の開発を進めるとともに、見方や考え方を働かせるための問いかけの内容や方法、場面づくりについても研究を進める。

3 研究の具体的内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

- ア 学力向上推進委員会を設置し、全校体制で事業に取り組む。推進地域の高等学校や中学校との連携を図り、県外の先進校を視察し、本校で実施する際の参考とする。
- イ 校内研修と互見授業による研究協議や意見交換を実施する。
- ウ 学力向上推進協議会を年2回実施し、推進地域の高等学校や中学校と指導方法を検討する。協議会に併せて、公開授業を実施する。
- エ 近隣の中学校への視察を行い、中高で連携して、学力定着の課題について問題意識を共有する。

(2) 推進地域（教育委員会等）との連携

国語・数学・英語の指導案作成の助言と、互見授業・公開授業において継続的な訪問指導を受ける。

(3) 学力向上に向けた具体的な取組

- ア 主体的・対話的で深い学びに対応した教材の開発について
 - ・近隣の中学校と連携・協力を強化して、国語・数学・英語について、主体的・対話的で深い学びに対応した自主教材の開発を行い、授業実践し、授業改善を図った。
 - ・近隣の中学校と連携し、生徒の「つまずき」「学び直し」をテーマに、学力定着の課題について問題意識の共有を図った。

<中学校訪問（平成30年11月8日、12月18日）>

中高で連携して学力定着の課題について問題意識の共有を図る。

授業見学 新潟市立小須戸中学校（国語・英語）

- イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業展開について
 - ・国語・数学・英語の各教科担当者間で、見方や考え方を働かせるための問いかけの内容や方法、場面づくりについて、研究を進め、授業で実践した。
 - ・国語・数学・英語の授業において、「学習共同体」の構築を目指し、協同学習を取り入れて、互いに自分の考えを、自分の言葉で説明する機会を設け、表現力の向上に努めた。また、学び合いを続けることで、互いに質問し合うことができる人間関係を構築して、協働して課題解決に向かう姿勢を育むことができるような授業展開を行った。
- ウ 自己肯定感を高め、自らの進路選択に主体的に関わる力を育成する進路指導について

<進路講演会（平成30年7月9日）>

夢をもつことの大切さ、学ぶことの意義をテーマとした講演を聴くことで、進路実現に向かう意欲を高める。

演題 「夢切り拓いて」

講師 青柳 勸（新潟産業大学教員）

エ 校内研修について

全教職員の研修を行い、スキルアップを図った。また、各教科担当者間で、見方や考え方を働かせるための問いかけの内容や方法、場面づくりについて研究を深めた。

<校内研修（平成30年8月23日）>

講義 「主体的に学ぶ生徒の育成について」

講師 田中一裕 准教授（新潟大学創生学部）

教職員同士のグループワークの実施

オ 研究授業について

<第1回研究授業（平成30年10月24日）>

指導者 新潟県教育庁高等学校教育課指導主事 立川 純
新潟県立教育センター指導主事 中村敬行

授業参観① 2限 1年3組、数学・数学I

授業参観② 2限 1年4組、英語・コミュニケーション英語I

授業参観③ 3限 2年3組、国語・現代文B

<第2回研究授業（平成30年11月20日）>

指導者 初等中等教育局視学官 長尾篤志
初等中等教育局教育課程課 古川明子
新潟県教育庁高等学校教育課指導主事 立川 純
新潟県立教育センター指導主事 本間康一
新潟県立教育センター指導主事 中村敬行

授業参観① 3限 2年3組、国語・古典B

授業参観② 3限 1年4組、英語・コミュニケーション英語I

授業参観③ 4限 1年4組、数学・数学I

○ 指導・助言

- ・ 教員は、生徒の学ぶ意欲を高めさせるために、各教科を学ぶ意味（意義）を問い直すことが必要である。そして、教員自身が「何のために必要か」の答えを持つべきである。
- ・ 英語は、コミュニケーションツールとしての役割を果たしている。現在、日本には多くの多国籍企業が存在し、また多くの方々が海外に転勤している状況にあって、とても大切なツールである。
- ・ 数学は、単に問題を解くだけの教科ではなく、問題解決能力を育むツールとして大切である。
- ・ 学力不足の生徒は、教科内容をきちんと理解できていない。これは、今までの指導法では不十分であるということの証拠である。教員は、教材研究が要なので、時間を生み出して行う必要がある。
- ・ 授業での「本時の目標」をはっきりと提示すべきである。

カ 先進校視察

研究体制の整備、授業見学による技法の獲得を目的とする。

<群馬県立安中総合高等学校（平成30年7月10日）>

全教科の教職員が授業を通して協働的な学習を取り入れ、総合的な学習の時間でも生徒のキャリア教育支援を効果的に行うなど学校全体で様々な取組を行っていた。

<群馬県立吉井高等学校（平成30年7月10日）>

全教職員で話し合っただけの目標を念頭に、教員一人一人が授業改善を行うなど全体的な取組となっていた。

<神奈川県立港北高等学校（平成30年12月28日）>

授業力向上のための年度目標を設定し、年2回の「授業観察」による授業力向上の徹底した取組を行っていた。

<神奈川県立釜利谷高等学校（平成30年12月29日）>

学校設定科目と独自教材による基礎・基本の定着を図るとともに、生活習慣の向上も図るための生徒の情報共有を常に徹底する仕組みを取っていた。

(4) 検証の手立て

校内アンケート調査結果（平成31年1月実施）

基礎学力の定着と学習意欲の向上にあわせ、学習面の悩み等について把握する。

4 研究の成果、生徒の変容

研究の成果を明らかにするため、「学習状況アンケート」を実施した。

H30年度 学習状況アンケート結果 (全教科総合)

各項目単位 (%)	国語								数学				英語			
	古典B (2年1組、3組)				現代文B (2年2、4、5組)				数学I (1年3、4組)				コミュ英I (1年3、4組)			
質問項目	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
1 自分の学習活動について																
① 授業開始までに教科書やノートを準備している。	89.5	3.9	1.3	0.0	82.8	16.2	1.0	0.0	78.9	19.7	1.3	0.0	75.7	17.6	5.4	1.4
② 集中して先生の話を聞くようにしている。	56.6	38.2	0.0	0.0	63.6	36.4	0.0	0.0	65.8	31.6	2.6	0.0	43.2	47.3	8.1	1.4
③ 学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができる。	28.9	53.9	11.8	0.0	45.5	46.5	8.1	0.0	34.2	60.5	2.6	2.6	29.7	58.1	9.5	2.7
④ 仲間の発言をよく聞いて、自分の考えを深めている。	42.1	48.7	2.6	1.3	54.5	44.4	1.0	0.0	55.3	40.8	2.6	0.0	39.2	52.7	6.8	1.4
⑤ 分からないことがあったら、仲間や先生に質問する。	40.8	42.1	10.5	1.3	51.5	33.3	15.2	0.0	56.6	35.5	7.9	0.0	36.5	37.8	21.6	4.1
⑥ この教科の力がついてきていると思う。	38.2	47.4	6.6	2.6	38.4	57.6	4.0	0.0	44.7	43.4	10.5	1.3	32.4	52.7	12.2	2.7
2 授業について																
① 課題や目標が示されるので学びやすい。	56.6	34.2	2.6	1.3	66.7	31.3	2.0	0.0	86.8	13.2	0.0	0.0	59.5	39.2	1.4	0.0
② プリントなどの資料が工夫されている。	57.9	32.9	3.9	0.0	77.8	21.2	1.0	0.0	85.5	13.2	1.3	0.0	77.0	20.3	2.7	0.0
③ 板書が見やすく、わかりやすい。	55.3	31.6	5.3	2.6	68.7	27.3	4.0	0.0	90.8	9.2	0.0	0.0	81.1	17.6	1.4	0.0
④ 説明がわかりやすく、よく理解できる。	50.0	36.8	6.6	1.3	59.6	38.4	2.0	0.0	86.8	13.2	0.0	0.0	74.3	23.0	2.7	0.0
⑤ 仲間と相談しながら考えを深める時間がある。	67.1	21.1	5.3	1.3	84.8	14.1	1.0	0.0	73.7	26.3	0.0	0.0	71.6	25.7	2.7	0.0
⑥ 教科の知識や考え方が身につく内容だ。	46.1	42.1	5.3	1.3	63.6	34.3	2.0	0.0	77.6	21.1	1.3	0.0	70.3	27.0	2.7	0.0

【回答項目と数値】 4… あてはまる 3… 少しあてはまる 2… あまりあてはまらない 1… あてはまらない

- 本事業において、アクティブ・ラーニング(AL)型授業を実践することで、教科の基礎的・基本的な知識・技能を習得することだけでなく、授業時に生徒たちが互いの意見を交流させる活動を取り入れることを念頭において、授業改善を行ってきた。
- 生徒自身の学習活動に関する質問項目の「学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができる」において、「あてはまる」「少しあてはまる」と答えた生徒の割合は、古典82.8%、現代文92%、数学94.7%、英語87.8%といずれも80%を上回った。8割を超える生徒が、各教科において、AL型授業を取り入れることで、生徒たちは自分の意見を何らかの形で伝えることができるようになったと感じている。

5 課題とその分析

- 学年が進むにつれ、国語、数学、英語の学習内容が次第に難しくなる中、授業中に仲間と対話をしながら考えを深めたり、議論を行ったりするためには、知識・技能の習得が必要不可欠である。
- 上記4における「学習状況アンケート」の、「1 自分の学習活動について」の質問項目③「学習活動の中で、自分の意見を仲間に伝えることができる」について、「あてはまる」を選んだ生徒は各科目で約30%弱～35%未満である。一方、「2 授業について」の質問項目⑥「教科の知識や考え方が身につく内容だ」について、90%近い生徒が「あてはまる」「少しあてはまる」を選んでいる。つまり、生徒の大半は、AL型授業について前向きにとらえているが、教科の内容についての自分の意見や考えを、自信をもって仲間に伝えるまでには至っていない。したがって、各教科の基礎知識を習得させるための指導法の向上はもちろん、生徒の意見や考えをすくい上げ、学びを深めていく授業を展開していく指導法を確立することが重要である。
- 今後は、対話型の学習活動だけに偏ることなく、個の学びも大切にして、生徒自身が学びを振り返ることができるような授業展開を意識して、生徒の学力の定着を図る必要がある。

6 今後の取組

(1) 今年度の研究を踏まえた課題

- ・ 来年度は、国語・数学・英語に地歴・公民・理科を加えて研究を進める。
- ・ 各教科の授業研究や教材研究が主で、学校全体での連携が不十分であった。次年度は、学校全体で授業改善に取り組む体制を構築する。

(2) 各教科での授業改善の取り組み

- ・ 各教科で、定期的にアンケートを実施し、実態把握を行い、生徒がグループ活動の中で主体的に取り組むことができる授業展開を研究する。
- ・ 他校の実践を参考に、定期的に校内研修を実施し、情報を共有する。
- ・ 校内研修会において本校生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確化するとともに、互見授業後の研究協議会を充実させて、教科ごとでの議論、教科の枠を超えた教員同士の議論を活発に行う。
- ・ アンケートの結果を学校全体で共有するとともに、授業改善の取組の成果と課題を明確にする。
- ・ 各教科と学校全体のキャリア教育の関係性を重視し、自己肯定感をもたせ、自己有用感を向上させる授業を行う。

(3) 近隣の中学校や他の高等学校との連携のさらなる深化

- ・ 複数の近隣の中学校との連携を深めることで、生徒の実情を踏まえた、よりよい授業の在り方を検討し、中高のつながりのある指導方法を構築する。

7 その他

- (1) 主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業を継続し、言語活動を充実させ、生徒の思考力、判断力、表現力の育成を図り、学習内容を定着させる。
- (2) 近隣の中学校と連携し、つまずきやすい箇所について共通理解を深め、基礎学力を定着させる。
- (3) 公開授業を実施し、地域の高等学校と中学校に成果を普及させる。
- (4) 学力と自信を身に付けさせ、キャリア教育と連動させる。
- (5) 地域への広報活動を行い、本校に対する理解を深める。